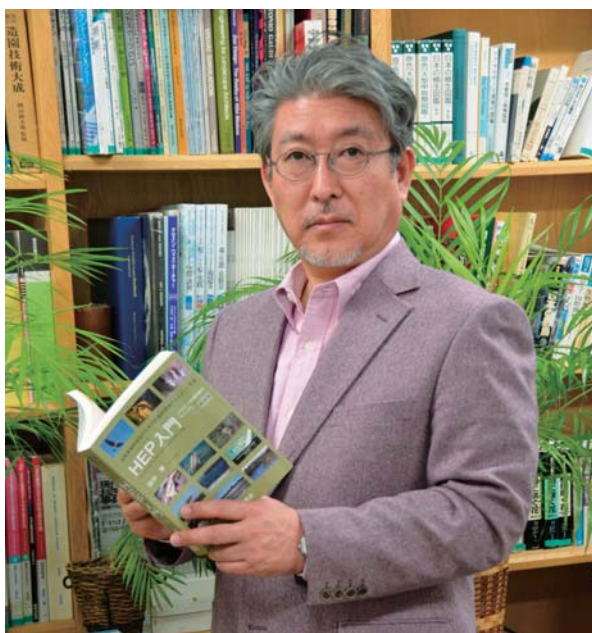


日本平からの「世界一の風景」、最大限活用を

東京都市大学 教授

田中 章さん

Akira Tanaka



経歴

静岡県清水区生まれ。県立清水東高校卒業。東京農工大学農学部環境保護学科卒業。米シガン大学大学院修士課程修了(マスター・オブ・ランドスケープアーキテクチャ)、東京大学大学院博士課程修了(農学博士)、英国立ウェールズ大学大学院日本プログラム環境マネジメント学科長などを経て、2002年、東京都市大学環境学部教授。58歳。

東大、東大大学院、東京農工大でも講義を担当。来年、静岡市で日中韓越4か国による環境アセスメント国際会議を開催する方向で調整中。「HEP入門<ハビタット評価手続き>マニュアル」(朝倉書店)など著書多数。
<http://www.yc.tcu.ac.jp/~tanaka-semi/>

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

「生物多様性」自治体も配慮を

環境学者として知られ、専門は自然や生態系の復元、生物多様性保全、環境アセスメント、造園学、生態学。「失われつつある自然や野生生物を人間社会と共存させられないかが私の研究の大きなテーマです」。米国に留学し、開発に際して、近隣に同じような自然やハビタット(野生生物のすみか)復元を事業者に義務づける生物多様性オフセットを日本で最初に紹介した。

「開発が悪いということではないんです。問題はどうかやったら自然を壊すことなく開発をうまく誘導できるかなんですね。欧米などの先進国ではこの制度が法律で義務化されていますが、日本はまだ法制化されていないことが課題です」と話す。

生物多様性や景観に配慮したグリーンインフラの視点を地方自治体がどんどん取り入れてほしい、と訴える。「多様な付加価値が生まれ、生態系が復活したり開発前より景観がよくなった例もあります」。

「自然復元に取り組んで」

故郷清水について田中さんは「世界的な観光資源が事実上眠ったままの状態でもつたいない」と指摘。「仕事で多くの国を訪れましたが、日本平の東側、巴川流域から折戸湾、三保松原、駿河湾越しに見る伊豆半島、そして富士山の雄姿、これは世界一の風景の一つです」と太鼓判を押す。

その上で、「世界一の風景」のエリアをきちんと確保し、「例えば、清見寺の五百羅漢や朝鮮通信使詩書など周辺の歴史的、文化的資源を保全し利用すればサステイナブルツーリズムが実現できます」。

そのためにはインバウンド対策の重要性を指摘する。「その土地ならではの自然や風土を望む外国の人たちにはしっかり理解してもらうためには、英語の案内板とかパンフレットなどの充実が求められます。彼らはSNSを使って世界のどこへでも発信しますからPR効果は絶大です。一種の観光大使の役目も果たしてくれます」。

子供の頃から自然に接することや生き物が好きだったという田中さん。「一般の方に手つかずの自然だと思われている場所のほとんどは実は長い歴史の中で人間がつくってきたものです。ただ最初から人間が質の高い自然を復元、創出するのは無理なんです。時間がやってくるのです。清水も開発が進んでいます。ぜひ清水の自然復元に取り組んでほしいですね」。

(文…長田義明、写真…田中さん提供)